

ボーダーフリー大学教員の大学教授職に対する認識 —「大学教授職の変容に関する国際調査」を用いた基礎的分析—

葛 城 浩 一

ボーダーフリー大学教員の大学教授職に対する認識

—「大学教授職の変容に関する国際調査」を用いた基礎的分析—

葛 城 浩 一*

1. はじめに

今日、大学教授職（以下、アカデミック・プロフェッションと表記）は大学を取り巻く環境の変化によって、その使命・役割・機能の再構築の問題に直面している。特に「研究大学」を頂点にした階層の底辺に位置する「ボーダーフリー大学」と呼ばれる大学では、こうした傾向が強くみられる。なお、本稿では「ボーダーフリー大学」を、「受験すれば必ず合格するような大学、すなわち、事実上の全入状態にある大学」と定義する。「ボーダーフリー大学」という用語自体は、そもそも河合塾による大学の格付けであり、通常の難易度がつけられない大学の意味で用いられている。本稿の定義に基づくボーダーフリー大学に相当する定員割れを抱えた大学は、2009年現在、私立大学全体の5割近くにまで達している（日本私立学校振興・共済事業団広報，2009）。こうした大学では選抜機能が働かないために、多様な学生、特に基礎学力や学習習慣、学習への動機づけが欠如した学習面での課題を抱える学生への対応に追われることになる。

本来、アカデミック・プロフェッションに期待される主要な役割は「教育」と「研究」である。それにもかかわらず、こうした大学では概して「教育」のみが期待され、「研究」を表立って行うことが憚られる状況にすらある。教員自身が描くアカデミック・プロフェッションに対するイメージと、周囲から期待されるそれとのギャップに苦悩する教員も少なくない。こうした意味において、ボーダーフリー大学はその他の大学に比して、アカデミック・プロフェッションの再構築の問題に絶えず晒されてきたといっても過言ではない。また、よりよい研究環境を得るべく上昇移動を希望しても、「研究」が許されない教員にとっては、上昇移動を担保するための研究業績をあげることが困難な構造下にあるという意味で、初期キャリア形成の問題も孕んでいる。

このように、ボーダーフリー大学におけるアカデミック・プロフェッションの問題は非常に重要な問題であるが、そこに焦点を当てた研究は皆無である。そもそも、ボーダーフリー大学自体、これまで研究対象として扱われることはほとんどなかった。これまでの高等教育研究の多くは、難易度の高い基幹大学を中心に行われており、基幹大学以外を対象とする場合も、サンプルの偏りがないう、多様な大学をひとまとめにした分析が行われることが多かったためである。

日本の代表的なアカデミック・プロフェッション研究としては、新堀編（1984）や有本・江原編（1996）、有本編（2008、近刊）が挙げられるが、これらもその例外ではない。すなわち、これまでのアカデミック・プロフェッション研究によって、教育・研究に対する関心や生活時間、労働条件

* 香川大学大学教育開発センター准教授

など明らかになった知見は少なくないが、そうした知見には難易度の高い基幹大学に所属する教員の回答が強く反映されていた可能性が考えられるのである¹⁾。加えて、有本・江原編（1996）や有本編（近刊）は国際比較の要素が、有本（2008）は有本・江原編（1996）との二時点比較の要素が強いので、国内の大学の多様性に配慮した分析が十分に行われているわけではない。

そこで、本稿では、ボーダーフリー大学に所属する教員のアカデミック・プロフェッションに対する認識を明らかにするための基礎的な分析を行う。すなわち、特に若手の教員に焦点をあて、彼らがどのような困難に直面しているのかを明らかにしたいと考える。

2. 研究の方法

本稿で使用するデータは、「21世紀型アカデミック・プロフェッション構築の国際比較研究」（平成18-21年度 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（A））の一環として実施された「大学教授職の変容に関する国際調査」である。このうち、本稿では日本の調査データのみを用いる。

日本の調査は、1992-1993年に実施された「カーネギー大学教授職国際比較調査」で対象とした19大学のうち、研究大学4校は同じ大学を対象とし、残りの非研究大学15校は学部構成や規模などが類似した大学を対象として、2007年8月に実施された。有効回答者数は1,408名であり、配布数を母数とした回答率は22.7%であった。

表1には、難易度別に分析対象者の概要を示している。難易度については、朝日新聞社（2007）『2008年版大学ランキング』の「2007入試難易度ランキング」の値を参考に、大学入試時の偏差値

表1 分析対象者の概要

	性別		年齢		
	男性	女性	ベテラン層	中堅層	若手層
低難易度群	161 87.0%	24 13.0%	91 50.0%	50 27.5%	41 22.5%
中難易度群	817 90.9%	82 9.1%	313 35.7%	329 37.6%	234 26.7%
高難易度群	288 93.8%	19 6.2%	85 28.1%	105 34.8%	112 37.1%
合計	1,266 91.0%	125 9.0%	489 36.0%	484 35.6%	387 28.5%
	職階				
	教授	准教授(助教授)	講師	助教	その他
低難易度群	87 46.8%	79 42.5%	18 9.7%	0 0.0%	2 1.1%
中難易度群	579 63.6%	249 27.4%	72 7.9%	3 0.3%	7 0.8%
高難易度群	99 32.0%	133 43.0%	72 23.3%	0 0.0%	5 1.6%
合計	765 54.4%	461 32.8%	162 11.5%	3 0.2%	14 1.0%

注：上段は実数，下段は割合。

で50未満の「低難易度群」、50以上60未満の「中難易度群」、60以上の「高難易度群」の3群に分類している。本稿では、この「低難易度群」を操作的にボーダーフリー大学と定義する。ボーダーフリー大学の定義としては偏差値の設定が若干高めであるのは、学力試験を課さない推薦入試などの枠が広く一般入試の枠が狭い学部、また一般入試で課される科目の少ない学部では、偏差値が実態よりも高く算出されているためである²⁾。各群の大学数及びサンプル数は、「低難易度群」が8大学186名、「中難易度群」が7大学911名、「高難易度群」が4大学311名である。

なお、初期キャリア形成の問題を考える上では、職階による分析は妥当でないと考え、年齢層による分析を行う。年齢層については、葛城・山野井(2007)を参考に3群に分類している。すなわち、2004年時点の教授の平均年齢は57.2歳、助教授の平均年齢は45.9歳であるため、57歳以上を「ベテラン層」、46歳以上57歳未満を「中堅層」、46歳未満を「若手層」の3群に分類している。本稿では特に「若手層」に着目して分析を行いたい。

3. 分析

ボーダーフリー大学の教員、なかでも若手の教員は、どのような困難に直面しているのだろうか。その点について明らかにするために、以下ではまず、彼らが現在の仕事や所属している機関(大学、学部など)をどのように捉えているのかについて検討する。次に、そうした認識が形成される背景を、アカデミック・プロフェッションに期待される主要な役割である教育活動と研究活動という二つの視点から検討する。分析の枠組みは図1の通りである。

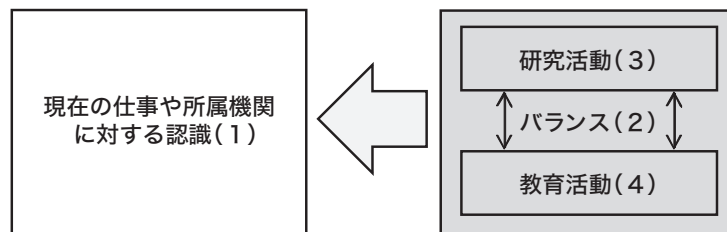


図1 分析の枠組み

(1) 現在の仕事や所属機関に対する認識

仕事に対する満足度

まず、ボーダーフリー大学の教員は、現在の仕事に対してどの程度満足しているのだろうか。その点について、平均値の差の検定を行った結果を示しているのが表2左側である(以下の表も同様)。この結果をみると、ボーダーフリー大学の教員の仕事に対する満足度は、その他2群の大学の教員に比べ、必ずしも低いわけではないことが確認できる。すなわち、「低難易度群」は「高難易度群」に比べれば満足の度合いは低いものの、「中難易度群」に比べれば満足の度合いは高いという結果が得られた。ただし、多重比較を行った結果、統計的に有意な差は「高難易度群」との間にはみら

れたものの ($P < 0.001$), 「中難易度群」との間にはみられなかった。こうした傾向は, 「若手層」だけを対象とした分析結果 (表2右側参照) から確認できる。

また, 表3左側に示すように, ボーダーフリー大学の教員は, その他2群の大学の教員に比べ, 仕事の現状を肯定的に捉えている様子が確認できる。すなわち, 「低難易度群」はその他2群に比べ, 「もし人生を繰り返すことができるならば, 私は大学教員にならないだろう」や「私の仕事は相当な心理的緊張を伴っている」という項目に対しては否定的であるという結果が得られた ($P < 0.05$)。また, ボーダーフリー大学の教員が, その他2群の大学の教員に比べ, 教育と研究の両立に必ずしも苦しんでいるわけではないことも確認できる。すなわち, 「教育と研究の両立は非常に難しい」という項目に対しては, 「低難易度群」は「高難易度群」に比べれば肯定的であるが, 「中難易度群」に比べれば否定的であるという結果が得られた。ただし, 多重比較を行った結果, 有意な差は「高難易度群」との間にはみられたものの ($P < 0.001$), 「中難易度群」との間にはみられなかった。

「若手層」だけを対象とした分析結果を示したのが表3右側である。有意差こそみられないものの, ボーダーフリー大学の教員が仕事の現状を肯定的に捉えているという点では, 先の分析結果と同様の傾向が確認できる。しかしその一方で, 先の分析結果とは異なり, ボーダーフリー大学の教員が教育と研究の両立に苦しんでいる姿がうかがえる。すなわち, 「教育と研究の両立は非常に難しい」という項目に対し, 難易度の低い大学ほど肯定的であるという結果が得られた。

このように, ボーダーフリー大学の教員の仕事に対する満足度は, 若手の教員であっても, その他2群の大学の教員に比べ, 必ずしも低いわけではなく, 総じて仕事の現状を肯定的に捉えていることが確認された。しかし, 若手の教員については, 特に教育と研究の両立に苦しんでいる姿がうかがえた。

表2 現在の仕事に対して全般的にどの程度満足しているか?

	低難易度群	中難易度群	高難易度群	若手層		
				低難易度群	中難易度群	高難易度群
あなたは現在の仕事に対して全般的にどの程度満足していますか。	3.68	3.56	3.85	3.51	3.34	3.78

注: *** は $P < 0.001$, ** は $P < 0.01$, * は $P < 0.05$ 。以下同様。

値は「非常に満足」=5から「非常に不満足」=1の平均値。

表3 以下の項目についてどのように思うか?

	低難易度群	中難易度群	高難易度群	若手層		
				低難易度群	中難易度群	高難易度群
もし人生を繰り返すことができるならば, 私は大学教員にならないだろう。	2.15	2.38	2.25	2.27	2.41	2.36
私の仕事は相当な心理的緊張を伴っている。	3.42	3.64	3.61	3.33	3.65	3.59
教育と研究の両立は非常に難しい。	3.37	3.41	3.09	3.82	3.67	3.41

注: 値は「全くそう思う」=5から「全くそう思わない」=1の平均値。

異動に対するモチベーション

次に、ボーダーフリー大学の教員は、異動に対するモチベーションをどの程度有しているのだろうか。過去5年間に、以下のような職務や職場に変わることを考えたことがあるかどうかたずねた結果を示しているのが表4左側である。この結果をみると、ボーダーフリー大学の教員は、その他2群の大学の教員に比べ、異動に対するモチベーションが低いことが確認できる。すなわち、「国内の他の高等教育機関や研究機関における教授職」や「外国における教授職」については、難易度の高い大学ほどその割合が高いのに対し、「考えたことがない」については、難易度の低い大学ほどその割合が高いという結果が得られた ($P < 0.05$)。

こうした傾向は、「若手層」だけを対象とした分析結果(表4右側参照)からもうかがえる。すなわち、「国内の他の高等教育機関や研究機関における教授職」や「外国における教授職」については、有意差こそみられないものの、難易度の高い大学ほどその割合が高い。また、「考えたことがない」についても、「低難易度群」はその他2群に比べ、その割合が有意に高い ($P < 0.05$)。

このように、ボーダーフリー大学の教員は、若手の教員であっても、その他2群の大学の教員に比べ、異動に対するモチベーションが低いことが確認された。

表4 過去5年間に、以下のような職務や職場に変わることを考えたことがあるか？

	低難易度群	中難易度群	高難易度群	若手層		
				低難易度群	中難易度群	高難易度群
所属している機関における事務職	2.3%	1.8%	1.0%	5.0%	2.2%	0.9%
国内の他の高等教育機関や研究機関における教授職	44.0%	49.9%	55.6%	52.5%	66.5%	70.5%
外国における教授職	12.0%	15.3%	28.8%	20.0%	20.9%	31.3%
高等教育機関や研究機関以外で働くこと	14.9%	24.2%	21.5%	27.5%	32.6%	26.8%
考えたことがない	52.0%	40.5%	35.4%	40.0%	20.9%	22.3%

注：値は割合。

帰属意識

それでは、ボーダーフリー大学の教員の帰属意識はどこにあるのだろうか。回答者にとって「自分の専門分野」「自分の学部」「自分の大学」がどのくらい重要かたずねた結果を示しているのが表5左側である。この結果をみると、ボーダーフリー大学の教員は、その他2群の大学の教員に比べ、「自分の専門分野」を重要視する傾向は弱く、「自分の大学」を重要視する傾向が強いことが確認できる。すなわち、「自分の専門分野」を重要視する傾向は、難易度の高い大学の教員ほど強い一方で、「自分の大学」を重要視する傾向は、難易度の低い大学の教員ほど強いという結果が得られた ($P < 0.05$)。ただし、値の大きさに鑑みれば、ボーダーフリー大学の教員でも、「自分の大学」よりも「自分の専門分野」を重要視している点には留意したい。なお、「若手層」だけを対象とした分析結果(表5右側参照)からも、有意差こそみられないものの、同様の傾向がうかがえる。

このように、ボーダーフリー大学の教員の帰属意識は、基本的には「自分の専門分野」にあると考えられるが、若手の教員であっても、その他2群の大学の教員に比べ、「自分の専門分野」を重要視する傾向は弱く、「自分の大学」を重要視する傾向が強いことが確認された。

表5 以下の項目はどのくらい重要か？

	低難易 度群	中難易 度群	高難易 度群	若手層			
				低難易 度群	中難易 度群	高難易 度群	
自分の専門分野	4.32	4.43	4.53	**	4.49	4.55	4.58
自分の学部	3.69	3.67	3.63		3.54	3.53	3.45
自分の大学	3.82	3.65	3.63	*	3.73	3.47	3.45

注：値は「大変重要」=5から「全く重要でない」=1の平均値。

(2) 教育活動と研究活動のバランス

前項では、ボーダーフリー大学の教員の仕事に対する満足度は、若手の教員であっても、その他2群の大学の教員に比べ、必ずしも低いわけではなく、総じて仕事の現状を肯定的に捉えていることが確認された。それゆえか、若手の教員でも、異動に対するモチベーションは低く、「自分の大学」を重要視する傾向が強いことも確認された。しかし、若手の教員については、特に教育と研究の両立に苦しんでいる姿がうかがえた。

そこで以下では、ボーダーフリー大学の若手の教員が教育と研究の両立に苦しむ背景を、アカデミック・プロフェッションに期待される主要な役割である教育活動と研究活動という視点から検討する。本項ではまず、教育活動と研究活動のバランスを、自身の関心と実際に費やす時間という二つの点から確認する。

自身の関心

ボーダーフリー大学の教員の関心は教育にあるのだろうか、それとも研究にあるのだろうか。回答者自身の関心が主として教育あるいは研究のどちらにあるかたずねた結果を示しているのが表6左側である。この結果をみると、ボーダーフリー大学の教員は、その他2群の大学の教員に比べ、教育に対する関心が高いことが確認できる。すなわち、難易度の低い大学ほど教育に対する関心が高いという結果が得られた ($P < 0.001$)。こうした傾向は、「若手層」だけを対象とした分析結果(表6右側参照)からも確認できる。

このように、ボーダーフリー大学の教員は、若手の教員であっても、その他2群の大学の教員に比べ、教育に対する関心が高いことが確認された。

表6 自身の関心は主として教育あるいは研究のどちらにあるか？

	低難易 度群	中難易 度群	高難易 度群	若手層				
				低難易 度群	中難易 度群	高難易 度群		
あなたご自身の関心は主として教育あるいは研究のどちらにありますか。	2.51	2.78	3.07	***	2.68	2.97	3.10	**

注：値は「主として研究」=4から「主として教育」=1の平均値。

実際に費やす時間

それでは、教育に対する関心の高いボーダーフリー大学の教員は、教育活動や研究活動にどのくらいの時間を費やしているのだろうか。平均的な1週間でどのくらいの時間を以下の各活動に費やしているかたずねた結果を示しているのが表7、8である。なお、表7には学期中の結果を、表8には休暇中の結果を示している。

まず、学期中については、表7左側に示すように、ボーダーフリー大学の教員が、その他2群の大学の教員に比べ、教育活動に多くの時間を費やしているため、研究活動やその他の学術活動にあてる時間の確保が困難であることが確認できる。すなわち、難易度の低い大学の教員ほど「教育」に費やす時間が多く、「研究」や「その他の学術活動」に費やす時間は少ないという結果が得られた（ $P < 0.001$ ）。「若手層」だけを対象とした分析結果（表7右側参照）からも、同様の傾向が確認できる。

一方、休暇中については、表8左側に示すように、ボーダーフリー大学の教員が、その他2群の大学の教員と同程度に、教育活動や研究活動、その他の学術活動に時間を費やしていることが確認できる。すなわち、「教育」や「研究」、「その他の学術活動」で有意差がみられず、先の分析結果（難易度の低い大学の教員ほど「教育」に費やす時間が多く、「研究」や「その他の学術活動」に費やす時間は少ない）と同様の傾向もみられなかった。「若手層」だけを対象とした分析結果（表8右側参照）からは、「教育」で有意差こそみられるものの³⁾、ほぼ同様の傾向がうかがえる。

このように、ボーダーフリー大学の教員は、若手の教員であっても、その他2群の大学の教員に比べ、特に学期中には教育活動に多くの時間を費やしているため、研究活動やその他の学術活動にあてる時間の確保が困難であることが確認された。

表7 平均的な1週間でどのくらいの時間を以下の各活動に費やしているか？（学期中）

	低難易 度群	中難易 度群	高難易 度群	若手層				
				低難易 度群	中難易 度群	高難易 度群		
教育	23.32	20.68	16.96	***	24.97	22.94	16.81	***
研究	14.67	15.93	19.88	***	13.74	16.11	21.35	***
社会サービス	1.68	4.44	3.60	***	1.47	4.18	3.07	
管理運営	6.71	7.32	7.30		7.76	7.21	7.49	
その他の学術活動	2.38	2.55	3.70	***	2.34	2.41	3.79	***
合計	48.76	50.93	51.44		50.29	52.86	52.51	

注：値は時間。表8も同様。

表8 平均的な1週間でどのくらいの時間を以下の各活動に費やしているか？（休暇中）

	低難易 度群	中難易 度群	高難易 度群	若手層				
				低難易 度群	中難易 度群	高難易 度群		
教育	7.31	7.99	7.07		8.38	9.64	6.62	*
研究	23.55	22.95	24.27		22.19	25.41	26.44	
社会サービス	1.54	3.81	3.23	***	1.30	3.42	2.63	
管理運営	3.09	4.75	5.18	**	4.11	4.86	6.20	
その他の学術活動	3.38	3.24	3.71		3.19	3.07	4.04	
合計	38.87	42.66	43.47		39.16	46.40	45.93	

(3) 研究活動

研究活動の実施状況

次に、ボーダーフリー大学の若手の教員が教育と研究の両立に苦しむ背景を、研究活動に焦点化して検討する。まず、今年度または昨年度、所属大学で研究をしたかどうかをたずねた結果を示しているのが表9左側である。この結果をみると、ボーダーフリー大学の教員は、その他2群の大学の教員に比べ、研究活動を多く行っていないことが確認できる。すなわち、難易度の低い大学の教員ほど「今年度、研究をした」割合は低く、「今年度も昨年度も研究をしなかった」割合が高いという結果が得られた ($P < 0.01$)。しかし、「若手層」だけを対象とした分析結果(表9右側参照)からは、有意差はおろか、同様の傾向もみられなかった。

このように、ボーダーフリー大学の教員は、その他2群の大学の教員に比べ、研究活動を多く行っていないことが確認された。ただし、若手の教員については、いずれの難易度の大学においても同程度に研究活動を行っていることがあわせて確認された。

表9 今年度または昨年度、所属大学で研究をしたか？

	低難易度群	中難易度群	高難易度群		若手層		
					低難易度群	中難易度群	高難易度群
今年度、研究をした。	81.7%	87.9%	93.6%	***	92.7%	91.5%	94.6%
昨年度、研究をした。	43.0%	40.6%	46.6%		61.0%	46.2%	50.9%
今年度も昨年度も研究をしなかった。	5.4%	2.4%	1.0%	**	0.0%	1.7%	0.0%

注：値は割合。

研究活動に対する所属機関の期待

それでは、ボーダーフリー大学では、当該教員に研究活動を求めているのだろうか。その結果を示しているのが表10左側である。この結果をみると、ボーダーフリー大学は、その他2群の大学に比べ、当該教員に研究活動を求めている様子が確認できる。すなわち、「本学では、すぐれた研究業績を持つことが教員評価において重要である」「私の学科でテニユア(終身在職権)を得ようとするなら著書や論文を公表しなければならない」「本学での私の職務には、継続的な研究活動が期待されている」「国際的に活躍している学者であることは、本学での教員評価で重要である」といった項目には、難易度の低い大学ほど否定的であるという結果が得られた ($P < 0.001$)。またその一方で、「本学では、昇進のために用いられる出版物は質的に評価されず、ただ「量的に数えられる」だけである」という項目には、難易度の低い大学ほど肯定的であるという結果が得られた ($P < 0.001$)。「若手層」だけを対象とした分析結果(表10右側参照)からも、ほぼ同様の傾向がうかがえる。

このように、ボーダーフリー大学は、その他2群の大学に比べ、当該教員に研究活動を求めておらず、若手の教員もその例外ではないことが確認された。

表10 学術研究に関する以下の項目についてどのように思うか？

	低難易 度群	中難易 度群	高難易 度群		若手層			
					低難易 度群	中難易 度群	高難易 度群	
本学では、すぐれた研究業績を持つことが教員評価において重要である。	3.83	4.19	4.62	***	3.98	4.05	4.56	***
私の学科でテニュア(終身在職権)を得ようとするなら著書や論文を公表しなければならない。	2.84	3.33	4.07	***	2.90	3.24	4.12	***
本学では、昇進のために用いられる出版物は質的に評価されず、ただ「量的に数えられる」だけである。	3.49	3.36	2.69	***	3.44	3.57	2.79	***
真に研究したいと思うよりも多くの研究をしなければならないと感じる。	3.09	3.40	3.32	**	3.39	3.51	3.44	
わが国では、学者が何を出版しても政治的あるいはイデオロギー的な制約を受けない。	3.22	3.19	3.19		2.88	3.07	3.13	
私の研究領域の研究費は5年前よりも今のほうが獲得しやすい。	2.72	2.45	2.96	***	2.44	2.52	2.92	**
本学での私の職務には、継続的な研究活動が期待されている。	3.55	3.69	4.14	***	3.71	3.76	4.17	***
国際的に活躍している学者であることは、本学での教員評価で重要である。	3.40	3.75	4.29	***	3.24	3.61	4.29	***

注：値は「はい」=5から「いいえ」=1の平均値。

また、所属機関が、以下の項目をどの程度強調しているかたずねた結果を示しているのが表11左側である。この結果をみると、ボーダーフリー大学は、その他2群の大学に比べ、人事を行う際には研究の質を考慮しておらず、当該大学において即戦力となる人材を求めていることが確認できる。すなわち、「業績に基づいて部局に予算を配分する」「評価に基づいて部局に予算を配分する」「人事を行う際には、研究の質を考慮する」といった項目は、難易度の低い大学ほど強調していないという結果が得られた ($P < 0.001$)。またその一方で、「人事を行う際には、大学で行う行事に関する実行力や応用力を考慮する」「大学外の仕事の経験を持った教員を採用する」といった項目は、難

表11 所属機関は、以下の項目をどの程度強調しているか？

	低難易 度群	中難易 度群	高難易 度群		若手層			
					低難易 度群	中難易 度群	高難易 度群	
業績に基づいて部局に予算を配分する。	2.62	2.94	3.07	***	2.44	2.98	2.95	*
評価に基づいて部局に予算を配分する。	2.54	2.92	3.16	***	2.41	2.94	3.04	**
基本的には学生数に基づいて学科に予算配分する。	3.72	3.71	3.63		3.66	3.61	3.60	
基本的には卒業生数に基づいて学科に予算配分する。	2.03	2.20	2.32	**	2.02	2.19	2.35	
人事を行う際には、研究の質を考慮する。	3.14	3.44	4.06	***	3.32	3.31	4.07	***
人事を行う際には、教育の質を考慮する。	3.02	3.12	3.14		3.07	2.99	3.02	
人事を行う際には、大学で行う行事に関する実行力や応用力を考慮する。	3.02	2.89	2.71	**	3.00	2.78	2.71	
大学外の仕事の経験を持った教員を採用する。	3.16	2.81	2.72	***	3.05	2.82	2.76	
教員が学外のサービス活動や起業活動を行うことを奨励する。	2.99	2.96	2.86		3.00	2.86	2.78	
高等教育をもっと支援するよう個々人、ビジネス、財団をうながす。	2.62	2.78	2.93	***	2.51	2.59	2.72	

注：値は「大変強調している」=5から「全く強調していない」=1の平均値。

易度の低い大学ほど強調しているという結果が得られた ($P < 0.01$)。「若手層」だけを対象とした分析結果(表11右側参照)からも、有意差こそみられない項目もあるものの、ほぼ同様の傾向がうかがえる。

このように、ボーダーフリー大学は、その他2群の大学に比べ、人事を行う際には研究の質を考慮しておらず、当該大学において即戦力となる人材を求めていることが確認された。先述のように、若手の教員については、いずれの難易度の大学においても同程度に研究活動を行っていることに鑑みれば、いかにボーダーフリー大学の若手の教員が、恵まれない研究環境の中で奮闘しているかがうかがえよう。

(4) 教育活動

授業内容・教育方法

最後に、ボーダーフリー大学の若手の教員が教育と研究の両立に苦しむ背景を、教育活動に焦点化して検討する。まず、授業内容や教育方法に関する以下の項目について、回答者自身にどの程度当てはまるかたずねた結果を示しているのが表12左側である。この結果をみると、授業内容に関しては、ボーダーフリー大学の教員は、その他2群の大学の教員に比べ、より実践的で、かつ具体的にわかりやすい授業内容、教育方法を学生に提供していることが確認できる。すなわち、難易度の低い大学の教員ほど、「授業では実践的な知識や技能」を重視し、「授業内容に価値と倫理の議論を組み込んでいる」一方で、「授業で国際的な視点や内容を重視」してはいないという結果が得られた ($P < 0.05$)。また、教育方法に関しては、「授業でカンニングや盗作した場合の結果について、学生に教えて」おり、「授業での成績は学生の到達度を厳密に反映している」という結果が得られた ($P < 0.05$)。「若手層」だけを対象とした分析結果(表12右側参照)からも、有意差こそみられない項目もあるものの、ほぼ同様の傾向がうかがえる。

このように、ボーダーフリー大学の教員は、学習面での課題を抱える学生に対処するために、若手の教員であっても、その他2群の大学の教員に比べ、より実践的で、かつ具体的にわかりやすい授業内容、教育方法を学生に提供していることが確認された。

表12 授業内容や教育方法に関する以下の項目についてどの程度当てはまるか？

	低難易 度群	中難易 度群	高難易 度群		若手層			
					低難易 度群	中難易 度群	高難易 度群	
あなたの授業では実践的な知識や技能が重視されている。	3.56	3.52	2.98	***	3.64	3.41	3.02	**
あなたは授業で国際的な視点や内容を重視している。	3.35	3.45	3.62	*	3.15	3.33	3.50	
あなたは授業内容に価値と倫理の議論を組み込んでいる。	3.31	3.27	3.01	**	3.08	3.16	2.66	**
あなたは授業でカンニングや盗作した場合の結果について、学生に教えている。	3.64	3.35	2.90	***	3.95	3.45	3.08	**
あなたの授業での成績は学生の到達度を厳密に反映している。	3.76	3.60	3.56	*	4.03	3.62	3.64	*

注：値は「当てはまる」=5から「当てはまらない」=1の平均値。表13、14も同様。

教育以外の活動との関連性

次に、教育以外の活動との関連性に関する以下の項目について、回答者自身にどの程度当てはまるかたずねた結果を示しているのが表13左側である。この結果をみると、ボーダーフリー大学の教員は、その他2群の大学の教員に比べ、教育活動と研究活動が乖離していることが確認できる。すなわち、難易度の低い大学の教員ほど、「社会サービス活動は教育活動に役立っている」と考えているが、「研究活動は教育活動に役立っている」とは考えていないという結果が得られた($P < 0.05$)。「若手層」だけを対象とした分析結果(表13右側参照)では、有意差こそみられないものの、同様の傾向がうかがえる。

このように、ボーダーフリー大学の教員は、若手の教員であっても、その他2群の大学の教員に比べ、教育活動と研究活動が乖離していることが確認された。こうした教育活動と研究活動の乖離には、先述の「より実践的で、かつ具体的でわかりやすい授業内容、教育方法」の提供が関係しているとも考えられる。

表13 教育以外の活動との関連性に関する以下の項目についてどの程度当てはまるか？

	低難易 度群	中難易 度群	高難易 度群	若手層		
				低難易 度群	中難易 度群	高難易 度群
あなたの研究活動はあなたの教育活動に役立っている。	4.02	4.03	4.22	3.85	4.00	4.14
あなたの社会サービス活動はあなたの教育活動に役立っている。	3.48	3.29	3.02	3.16	3.09	2.96

教育改善活動の取り組み

最後に、教育改善活動の取り組みに関する以下の項目について、回答者自身にどの程度当てはまるかたずねた結果を示しているのが表14左側である。この結果をみると、ボーダーフリー大学の教員は、その他2群の大学の教員に比べ、組織的に教育改善活動を促す枠組みが十分でないにもかかわらず、個人レベルでの教育改善活動に積極的に取り組んでいることが確認できる。すなわち、難易度の低い大学ほど、「授業の質を高めるための適切なトレーニングコース」は整備されていないにもかかわらず、「学生の不十分な点を補うために基本的な技能を向上させる時間を増やしている」という結果が得られた($P < 0.001$)。「若手層」だけを対象とした分析結果(表14右側参照)からも、ほぼ同様の傾向がうかがえる。

表14 教育改善活動の取り組みに関する以下の項目についてどの程度当てはまるか？

	低難易 度群	中難易 度群	高難易 度群	若手層		
				低難易 度群	中難易 度群	高難易 度群
あなたは、学生の不十分な点を補うために基本的な技能を向上させる時間を増やしている。	3.96	3.69	3.54	4.18	3.76	3.60
あなたは、授業評価に応じて教授法を向上させることが奨励されている。	3.74	3.92	3.50	3.72	3.96	3.45
あなたの機関では授業の質を高めるための適切なトレーニングコースがある。	1.79	2.35	2.46	1.69	2.29	2.18

このように、ボーダーフリー大学の教員は、若手の教員であっても、その他2群の大学の教員に比べると、組織的に教育改善活動を促す枠組みが十分でないにもかかわらず、個人レベルでの教育改善活動に積極的に取り組んでいることが確認された。

4. おわりに

本稿では、ボーダーフリー大学に所属する教員のアカデミック・プロフェッションに対する認識を明らかにするための基礎的な分析を行った。すなわち、特に若手の教員に焦点をあて、彼らがどのような困難に直面しているのかについて明らかにするために、彼らの現在の仕事や所属機関に対する認識、及びアカデミック・プロフェッションに期待される主要な役割である教育活動と研究活動という点から検討を行った。分析の結果得られた主要な知見は以下の通りである。

まず、ボーダーフリー大学の教員の仕事に対する満足度は、若手の教員であっても、その他2群の大学の教員に比べ、必ずしも低いわけではなく、総じて仕事の現状を肯定的に捉えている。それゆえか、若手の教員でも異動に対するモチベーションは低く、「自分の大学」を重要視する傾向が強い。しかし、若手の教員については、特に教育と研究の両立に苦しんでいる姿がうかがえた。

若手の教員が教育と研究の両立に苦しむ要因としては、本稿の知見から大きく三つ挙げられる。一つ目は、ボーダーフリー大学は、その他2群の大学に比べ、当該教員に研究活動を求めているということである。例えば、人事を行う際には研究の質を考慮しておらず、大学で行う行事に関する実行力や応用力を持った教員や大学外の仕事の経験を持った教員のように、当該大学において即戦力となる人材を求めているのである。若手の教員については、いずれの難易度の大学においても同程度に研究活動を行っていることに鑑みれば、いかにボーダーフリー大学の若手の教員が、恵まれない研究環境の中で奮闘しているかがうかがえよう。

二つ目は、ボーダーフリー大学の教員は、若手の教員であっても、その他2群の大学の教員に比べ、より実践的で、かつ具体的でわかりやすい授業内容、教育方法を学生に提供しているが、それゆえか、教育活動と研究活動が乖離してしまっているということである。遠藤（2005）も指摘するように、「マージナル大学（≡ボーダーフリー大学）においては、研究と教育との乖離が極限まで進んでしまっており、「研究者であれば当然であるはずの学究志向が、マージナル大学においてはリスク要因＝諸刃の剣と化してしまう」（遠藤，2005，275頁，なお括弧内は筆者による）のである。学究志向、すなわち、研究に対する志向性は、若手の教員の方が強いことに鑑みれば⁴⁾、若手の教員は、教育と研究との乖離により多くの葛藤を抱えているといえよう。

三つ目は、ボーダーフリー大学は、その他2群の大学に比べ、組織的に教育改善活動を促す枠組みに乏しいということである。それにもかかわらず、ボーダーフリー大学の教員が、個人レベルでの教育改善活動に積極的に取り組んでいることに鑑みれば、そうした個人レベルでの教育改善活動は非効率的に行われている可能性がある⁵⁾。そもそも、ボーダーフリー大学は小規模校が多いため、組織的に教育改善活動を促す枠組みを当該大学独自で整備していくことには限界がある。現在、東日本地区大学間FDネットワーク・つばさや関西地区FD連絡協議会、四国地区大学教職員能力開

発ネットワークなど、FDを大学間連携で行う動きがみられる。ボーダーフリー大学は、こうした大学間連携も上手く利用しながら、当該教員が個人レベルでの教育改善活動を効率的に行えるように支援していく必要があるだろう。

しかし、そうした大学間連携のもとで提供されるFDプログラムが、難易度の高い基幹大学を中心に構想され、一般化されたものであるならば、それには自ずと限界があるだろう。先の遠藤(2005)の言葉を借りるならば、「マージナル大学の教壇に立つ者に求められるのは、狭い分野に特化した知識以上に、広い分野にわたる総合的教養と文化相対主義的感覚、そして学生たちのカルチャーを内在的・共感的に理解できる「勘性」である」(同上)。こうした能力を含め、ボーダーフリー大学の教員に求められる能力は他にもあるだろう。そうした諸能力を身につけるためのFDプログラムを構築していくためには、ボーダーフリー大学の教員の声に十分に耳を傾ける必要があると考える。

最後に、本稿の分析にはいくつかの問題点があることを指摘しておきたい。まず、サンプルの妥当性の問題である。特に本稿の分析の視角となる「低難易度群」の「若手層」のサンプルは41名と非常に少ない。今後は、同様のアンケート調査、あるいはインタビュー調査によって、本稿の知見を検証する必要がある。また、専門分野の特性の問題もある。すなわち、専門分野の特性によって、回答状況に差異が生じることは容易に予想される。しかし、本稿の分析が基礎的なものであることに加え、上述のようなサンプル数の問題もあったため、専門分野の特性を考慮した分析までは行わなかった。今後はこうした点にも留意して分析を進める必要があると考える。

【注】

- 1) 例えば、教育・研究に対する関心については、有本・江原編(1996)によって、日本の大学教員の研究に対する関心が極めて強いことが明らかにされた。また、有本編(2008)によって、日本の大学教員の研究に対する関心は依然として強くはあるものの、やや弱まっていることが明らかにされた。しかし、国内の大学の多様性に配慮したサンプリングが行われていれば、別の結果が得られていたかもしれない。
- 2) もうひとつの大きな理由としては、サンプル数の確保が挙げられる。本稿の分析の視角となるのは、「低難易度群」の「若手層」である。現状でも「低難易度群」の「若手層」のサンプルは41名と非常に少なく、偏差値の設定をこれ以上低くすると分析に耐えられないと判断した。
- 3) 多重比較を行った結果、有意な差は「高難易度群」との間にはみられたものの($P < 0.05$)、「中難易度群」との間にはみられなかった。すなわち、ボーダーフリー大学の教員は、難易度が中位の大学の教員と同程度には教育活動に時間を費やしていることが確認できる。
- 4) 表6と同様の分析を、年齢層間で行った結果が表15左側である。この結果をみると、若手の教員ほど研究に対する関心が高いことが確認できる($P < 0.001$)。「低難易度群」だけを対象とした表15右側からも、有意差こそみられないものの、同様の傾向がうかがえる。

表15 自身の関心は主として教育あるいは研究のどちらにあるか？（年齢層）

	ベテラン層	中堅層	若手層	低難易度群		
				ベテラン層	中堅層	若手層
あなたご自身の関心は主として教育あるいは研究のどちらにありますか。	2.64	2.82	2.98	2.43	2.52	2.68

注：値は「主として研究」=4から「主として教育」=1の平均値。

- 5) 葛城（近刊）は、18ヶ国を対象とした分析結果から、「授業の質を高めるための適切なトレーニングコース」を設けることができれば、個人レベルでの教育改善活動に充てる時間を抑えられる可能性、つまり、個人レベルでの教育改善活動を効率的に行いうる可能性を示唆している。

【参考文献】

- 朝日新聞社（2007）『2008年版大学ランキング』。
- 有本章（編）（2008）『変貌する日本の大学教授職』玉川大学出版部。
- 有本章（編）（近刊）『変貌する世界の大学教授職』玉川大学出版部。
- 有本章・江原武一（編）（1996）『大学教授職の国際比較』玉川大学出版部。
- 遠藤竜馬（2005）「マージナル大学のソフト・ランディングは可能か—ノンエリート高等教育への提言—」居神浩・三宅義和・遠藤竜馬『大卒フリーター問題を考える』ミネルヴァ書房，267-295頁。
- 葛城浩一（近刊）「教育活動」有本章編『変貌する世界の大学教授職』玉川大学出版部。
- 葛城浩一・山野井敦徳（2007）「アカデミック・サイクル」山野井敦徳編『日本の大学教授市場』玉川大学出版部，190-214頁。
- 新堀通也（編）（1984）『大学教授職の総合的研究』多賀出版。
- 日本私立学校振興・共済事業団広報（2009）「平成二十一年度私立大学・短期大学等入学志願動向」『月報私学』vol.141，6-7頁。

Recognition of the Academic Profession by Faculty who belong to Low-prestige Universities: a basic analysis using the “international survey of the Changing Academic Profession”

Koichi KUZUKI *

Today, the academic profession has been facing some issues on reconstructions of its missions, roles and functions caused by environmental changes surrounding universities. These issues seem to be especially serious in low-prestige universities. Consequently, this paper conducts a basic analysis using the “International Survey of the Changing Academic Profession” in order to make clear how faculty who belong to low-prestige universities relate to the changes occurring in the academic profession. In short, this paper clarifies what sort of difficulties faculty in these universities have been encountering, with a strong focus on younger faculty. The key findings are as follows.

The faculty of low-prestige universities generally do not always have lower job satisfaction and do have a more positive view as a whole of their current job situation than those of high-prestige universities. However, the younger faculty of low prestige universities do seem to have been struggling to balance the demands of teaching and research.

There are three possible key factors which cause younger faculty to suffer from such difficulties. First, the low-prestige universities basically do not expect their faculty to be so active in research. Second, the faculty of low-prestige universities generally provide more practical, concrete and easy-to-understand course contents as well as appropriate teaching methods for those of their students with learning difficulties, and consequently their teaching activities are likely to be disconnected from their research activities. Third, the low-prestige universities have poor frameworks for encouragement of educational improvements systematically, although they emphasize their teaching activities.

* Associate Professor, Center for Research and Educational Development in Higher Education, Kagawa University